

くプロローグく

その日・・・

透き通った秋空に千切れ雲が浮かぶ、蒼の里の平々凡々な昼下がりに。
坂の上の執務室では、穏やかな午後の陽が射し込み、奥の大机では、
珍しくこんな時間からいるナーガ長が、明日の予定に目を通していた。

——これは、たまたまだった。

その手前では、一仕事終えて集中の切れたリリが、ホルズに言いつけ
られた用事をサボって、長椅子で伸びていた。

——これも、たまたまだった。

坂下の広場を、修練所の子供達が、賑やかに駆け抜けて行く。最後の
授業が馬術教練だったので、馬繋ぎ場で現地解散になったのだ。

西風からの留学生のレンとカノンは、知り合いの厩係とお喋りをして
いて、集団からちよっと遅れた。

そして、普段はあまり通らない坂下の近道に足を踏み入れた。

——これも、本当のホントに、たまたまだったのだ。



風の末裔シリーズ・7thシーズンの1
～風の足跡(あしあと)・I～



白い砂に規則的な影を落として、波模様の風紋が地平まで続
く。

砂の大海原を横切る、心許ない足跡があった。千鳥足のそれ
を辿ると、頂点で小さいヒト型が倒れていた。

ヒト型は十歳位の男の子。瘡のある灰色の巻き髪も服装も、
ここいらの砂漠の住人とは異なる。

乾いた後頭部を影が覆い、救いの水が垂らされる。

「うっ……うあ……」

「生きていたか」

うつ伏せの身体に腕が回り、おお向けに引っくり返された。
次の瞬間、命の素みたいな水が、口中に広がる。

時間を掛けて水を与えられ、子供はようやく重い瞼を開けた。
見下ろす救い主は、自分より少し年上の少年だった。逆光の
黒い影の中に、目の白い所だけがやけに浮いて見える。真っ黒
な大きな瞳が、裏山でとれる黒スグリみたい…と思った。

「起きられるか？」

「うん…」

「後は自分で飲め」

水筒を渡され、子供はむしゃぶりの着いた。



「ゆっくり飲み、慌てるよ、むせて喉を切るぞ」

黒スグリの瞳の少年は、見た事もない濃い褐色の肌をしていた。ターバンも着衣も漆黒で、そんなに身体は大きくないのに、妙に大人びて見える。

子供の身体が安全圏に戻ったのを見て取って、少年は腕組みをして、鼻から息を吐いた。

「お前、馬鹿か？ 馬や駱駝もなく、徒歩で砂漠をほっつき歩くなんて。しかも足跡がぐるぐる回っていたぞ」

「お、お日様の方を向いて歩けば東なんでしょうっ」

「…いかん、本当の馬鹿だ。あかさ、太陽ってのは動くんぞ」

「うそ！ 太陽を中心に世界は回っているんでしょっ？ だから太陽は動かないんだし」

さっきまで死にかけていたとは思えない減らす口だ。

「なんだそりゃ？ だったら夜はどうなんだ、動かない筈の太陽は何処へ行っちゃまうっ」

「よ、夜はこちらの世界が裏返っているんだよっ」

「はあっ」

黒衣の少年は、首を横に振りながら立ち上がった。

「何処から来た？ 送って行ってやる。お前みたいなのは砂漠へ出ちゃいかん。子供にそんなデタラメを教える奴にも、一言

物申してやる」

「教えてくれたの、僕の母様だけれど、…いないよ」

「っ？」

「この間死んじやったし」

「……」

子供は座ったまま、へこりとお辞儀をした。

「お水をアリガト。村へは戻らないから、送ってくれなくてもいいの」

「おごっ」

「じゃあね、ばいばい」

そう言って立ち上がろうとするが、力が入らない感じで、またペタリと尻餅を付いてしまった。

「まったく何を根拠にそんなに自信満々なんだ？ どこへ行くにしても、とにかく送って行ってやる。放って置いて砂の上で干からびられても夢見が悪い」

少年はちよっと肩を上げてから、ヒュッと指笛を鳴らした。

とたん、背後でフルン！ と大きな声が出た。びっくりした子供が振り返ると、真っ黒い大きな馬の顔。

「うああっ!!」

「そんなに驚くなよ。ていうか、今気付いたのか？ すっとお

前に日陰を作ってくれていたのに」

「……」

馬は、一点の白もない艶やかな青毛に、橙色の額飾りの映える見事な馬だった。どう見たって、ちょっとした身分のある者の馬だ。子供も目を見開いたが、そういう意味とは違う驚き方をしていた。

少年は、鞍の鍔を降ろして、子供に顎で促した。

「乗れるか?」

「……」

「どうした、手伝いが必要か?」

「…やだ、怖い」

「怖いって…男の癖に弱虫だな」

「だ、だって、空を飛ぶんでしょ? この動物」

「!?!」

少年の目が、一瞬見開いた。

「前に、空から降りて来たのを見た事あるもの」

「あ、ああ…、それは風の民の馬だろう? 飛ぶのは奴等の馬

だけだよ」

「飛はないウマもいるの?」

「……」

少年はまじまじと子供を見た。

「馬を知らないのか?」

「僕の村、こんな大きい動物、いないし」

子供の声は大真面目で、嘘をついている風には見えない。

「こんなのいなくても普通に生活しているよ。部落の外に出掛ける事なんかないもん。やっぱり外なんか、ロクでもなかった。ただ広いばかりで、どこまで行っても砂しかないし」

少年は呆れ顔のまま、鍔革を引っ張って、二六分伸ばしてやった。

「とにかく、世の中の概おおむねの馬は、飛んだりしないから、乗れ。ほら、こっちの膝曲げて」

子供の足を持って、鞍上に押し上げてやる。それから自分は鞍を掴んで反動を付けて、身軽に子供の前に跨がった。

馬をぐるんと回しただけで、子供は石みたいにしがみついて来た。

「力を抜かないと、かえって落っこちるぞ」

「だって…」

「まあ最初は何でも怖い。一度経験すれば、怖くなくなる。そうなの?」

「そうやって、世の中から怖いものをなくして行くとだ」と

「へえ、誰が言ったの？」

「俺の父者(ていじや)」

少年は馬を駆けさせず、ゆっくり進めてやった。

「で、お前はどこへ行きたいんだ？」

「ああ、んと……ニシカゼのサト……」

褐色のうなじが、ピクリと緊張した。

「西風の……風の民の部落か？」

さっきまでと違って、急に声が陰しくなった。

「う……うん、そう……、ニシカゼのオササマってヒトに、会いた
くの？」

「何の用事だ？」

「……」

「言えないのか？」

詰問するような口調に、子供はいじりもどろした。

「えっと、風……、村に吹く悪い風を治めて下さるって……」

「悪い風……」

「うん、ニシカゼのオサって、そういう事が出来るんでしよう？」

村に来る商人のおじさんに聞いたの。風を思うままに操って、

皆を助けたり。あと予言も出来て、鯨岩の街の高波を知らせて、

沢山のヒトを命拾いさせたって。ホントに凄いヒトだって。だ

から、会ってお願いたいの」

「やめておけ」

「ええっ?!」

少年は硬い声のまま続けた。

「確かに、西風の長はそういう事が出来る。だけれど、あそこは今、ちょっとややこしいんだ。結界をうんと強くして、外界に対して閉ざしている。行ったって、部落を見つucker事すら出来ないぞ」

「そんなあ……」

「だからやめておけ。ほら、お前の部落に送ってやる。家族が心配しているだろ」

子供はいきなり手を突き放して、馬から飛び降りた。尻餅を突いたがすぐに立ち上がり、砂の上をフラフラと歩き出した。

「お、おい……」

少年は馬を止めて、馬上から叫んだ。

「待てったら」

「僕、行くんだ」

「意地っ張りのだな、お前には辿り着けないうって言っているだろ」

「でも行くの」

「もう助けてやらんぞ、死ぬぞ」

「いいの、死ぬもん！」

「バカヤロウ！」

「家族が心配なんかしていないもん、僕なんか・・・」

「・・・おい？」

子供がいきなりゼンマイが切れたみたいにパタリ倒れたので、少年は下馬して駆け寄って、顔色をなくした。子供のふくらはぎを、地元の砂の民の間でも『ヤバイ』って恐れられている奴が、カサカサと這っていたのだ。

子供が重い意識を戻すと、そこはさっきの馬の鞍の上だった。身体中熱くて、目の奥がグルグル回る。

うつ伏せに鞍に乗せられているのだが、馬のガフガフ言う息づかいから、きっと走っているんだろうと思った。だけれど、振動が全然ない。

うつすら目を開けたが景色は見えす、白い霧(もや)みたいなのが、凄く早さで飛んで行く。

「起きるか？ 頑張れ、すぐ医者に着せてやる」

「ほ…僕、村に帰らない…」

「まだそんな事言っているのか、意地っ張りの」

「い・や・だ……」

「話だけは通してやる」

「・・・」

「西風の民に知り合いがいる。でも、話を通すだけだぞ。だから、寝ていろ」

「ホ、ホン……ト……」

「お前、名前は何？」

「タウト……海霧(かむむ)の村の……タウト」

～西風～

初春の乾いた風が吹き抜ける石造りの路地を、二つの小さい影が駆け抜けて行く。

一人は、しめ縄みたいな三つ編みの、十かそこらの女の子。

もう一人は、砂漠の植物みたいなモシャモシャ頭の、三つ位の子。顔立ちが似ているから姉妹なのだろうが、二人とも砂漠の民の部落では異質な、象牙のような白い肌だった。

「おい、ファーにミィ、何を急いでいる？ 転ぶぞ」

曲がり角で、身体の大きな男性が呼び止めた。

姉妹は振り返って、大声で叫んだ。

「スオウせんせ！ ファー達、そこどころじゃないの」

「ナイノ！」

「何かあったのか？ また規則を破って部落の外で遊んでいた



んじゃないだろうな」

「何でもナイナイ——！」

「ナイ——」

姉娘は砂ぼこりを立てて、あっという間に駆け去って行った。修練所の教官に対して随分な態度だが、今の西風にとっては、ああいう子供達の明るさが、数少ない救い所だな…と、スオウはちょっと肩をすくめて、砂ぼこりを見送った。

「エノシラ先生、患者さんは今の方でおしまいです」

「そう、貴方も今日は早目にお帰りなさいな」

桶の塩水で手を洗いながら、エノシラは見習いの女の子に声を掛けた。たまには早い時間に帰してあげないと、この所、残業続きで休みもあげられなかったもの。

「「苦勞様でした」

女の子を見送り、エノシラはほつと息を吐いて、診療台に腰掛けた。

西風の部落が外に対して閉ざしている今、患者の数は減りそうな物なのだが、部落内の患者が増えた。ストレスを溜め込んで胃腸を悪くする者、不安が不注意を呼んで怪我をする者…、そういう重い空気が伝播して、普段快活な女将さんまでもが、そっと不眠治療の薬を買いに來たりした。

外科治療以外はエノシラの専門外なのだが、そんな事は言っていない。何せ今は、頼りの蒼の里のオウネお婆さんに指示を仰ぐ事が出来ないのだ。修行時代に習った記憶を便りに、毎日懸命に薬草を採って、薬を練っていた。

「ふっ…」

エノシラはもう一度ため息して、目を上げた。

彼女の目の下に隈があるのは、診療所の仕事で忙しいせいだけではない。その視線の先…古い机の隅に、貝殻模様の文箱がある。近寄って、そっと蓋を開く。

一番上はカラびた羊皮紙で、元気な子供の文字が黒々と踊る。《かねてから勧められていた蒼の里へ留学に行こうと思います。カノンも一緒です。カノンのお母さんを宜しくね。僕の誇るべき両親は、追い掛けて来て連れ戻すなんて、過保護なマネはしないと信じています。次にお会いする時の僕を、楽しみにしててください》

丁度三年前の春の朝、十一になる息子が残して行った、置き手紙。エノシラは、何度も読み返した。ピンピンと癖のあるハネ文字を、飽きる事なく見つめた。

「わあっ!」

子供の悲鳴に、エノシラは我に返った。前庭に駆け込んで来た二人の娘が、転んだのだ。

「ファア、ミィ!」

裸足で家を飛び出して前のめりに走って来る母を見て、ファアは、シマッタという顔をした。

「母さま、大丈夫だよ」

「あああ! 二人とも擦りむいてる! すぐ消毒しなくちゃ!」

「大丈夫だってば、それより、母さま、サボテンの谷に来て!」

「え? 貴方達、また部落の外で遊んでいたの?」

「お説教は後で聞く。それより大変なの。ハブサソリに噛まれた子がいるの!」

「イルノー」

「ええっ! 誰、お友達?」

「知らない子、えっと、名前何だっけ!」

「タウト」

「!!!」

酷い吐き気と脚の痛みに、タウトは意識を戻した。まぶたが貼り付いたように重くて、目を開けられない。

「一回は意識を戻したんだけど。馬の上でどんどん熱が上がって…」

聞き覚えのある声…ああ、さっき砂の上で、水をくれた男の子だ…。

「母さま、大丈夫？ この子」

「ダイジョブ？」

「命は大丈夫、アデルの処置がしっかりしていたから。でも、脱水症も酷いわ。ファー、しっかり日陰を作って」

「うん！」

「アデル、薬を飲ませるから、頭を支えてあげて」

「おっ」

何人かのわちゃわちゃした声…。口の中に苦いのが広がって、吐き気が更に強まった。

次は、ひんやりした空気で意識が戻った。いや、戻っているのかな、夢のかな、もう分からないや…。

今度は周りは静かで、刺すような陽射しもない。首を動かすと、額から濡れ手拭いが滑り落ちた。

そろそろと目を開けてみる。今度は開いた。薄暗い中に、石の壁と高い天井…建物の中だ。ピンと張られた清潔なシーツに、香の匂いがかすかに漂っている。

「どこだろう？ さっきの苦い薬のヒトの家かな？」

枕元に水差しが水滴を付けて光っていた。ゆっくり身を起こ

し、コップを掴んでキョロキョロしたが、ヒトの気配はない。水を口に含むと、今までに経験ない美味しさだった。

ベッドから足を下ろして、そろりと立ち上がった。先刻までのクラクラは消えている。それどころか、何だか不思議に気持ち良かった。

「あんなに苦しかったのに？ やっぱり夢なのかな？」

目が慣れてくると、その部屋の壁一面は書棚だった。別の一角に、墨壺とペン立ての乗った机。木戸の閉まった大きめの窓。隙間から覗くと、外は夜だった。

窓の反対側の扉を細く開けると、廊下だったが、シンとしていて先が真っ暗だ。

何だか怖くなって引き返し、窓を開いて、木枠を乗り越えて外に出た。裸足の足に、地面の冷たさがシンと来た。

四角い白い石壁が、あちこちにほんやり見える。どこかの部落なのだろうが、灯りの付いている窓はない。静けさの中、凍った空気が降りて来るばかり。

ヒト気のない砂漠より、ヒトがいる筈なのにヒト気のない所の方が怖かった。

「起きたのか？」

不意な声に、タウトは飛び上がった。声は後ろからではなく、
なまやぐように頭の上に響いた。

「じっだ、じっだ」

振り返って見上げると、今出て来た建物の屋根に、月を背景
にヒトが立っている。逆光でよく見えないが、ウェーブのかか
った長い髪、ハーフマントの…女性…?

「あ、あの…あの…」

慌てるタウトに構わず、女性はフワフワと歩いて、屋根の縁
に来た。体重がないみたいにな動きた。

「良い月だぞ、お前も来い」

「えっ、えっどっ？」

女性は手を開いて伸ばしたが、背の高い建物の屋根だし、タ
ウトに届く訳がない。しかし、女性の手が空間を掴んで振り上
げると、右手がグウンと引っ張られた。

「きゃっ」

びっくりしたけれど、痛くなかった。水に浮かぶみたいに当
たり前に身体が持ち上がり、ふわりと屋根に放り上げられた。

「じっだだ」

そのまま女性に手を引かれて、屋根のてっぺんまで誘いだ

なわれた。

「わああ」

青い月が、すく目の前に大きく閃(ひらめ)き、地平まで続く
規則的な風紋に、くっきりした影を作っている。

「あの砂の様子は、誰が描いているの?」

「西風だ」

耳元の声に驚いて振り向くと、女性の顔がすぐそこにあった。
瞳が夕陽みたいなオレンジ色。その女性が、タウトの後頭部に
手を回して、額をコンと当てて来た。

「熱は引いたみたいだな、どこか痺れるか?」

「う…ううん、元気だよ」

ドギマギしながら何とか答えた。

「そうか」

女性は額を離しても、タウトの頭に手を添えたままだった。
その手は温かく、不思議に心地よかった。

「ルウー」

地面から呼ぶ声。前掛けをした三つ編みの女性が、平カゴを
抱えて立っている。同じ髪色の二人の子供も、両脇から見上げ
ていた。

そこは屋根の上と違って、現実味のある世界だった。



「果実水作って来たわ、それと薬。その子、もう大丈夫なの？」

「屋根ー、いいな！ ファーも登っていい？」

「ミィも、ミィも！」

「静かになさい！ 黙っているって約束で連れて来たのよ」

「ぶう〜」

見下ろしたタウトは屋根の高さに戸惑ったが、女性が手を引いてくれたので一緒に飛び降りた。さっきは水の中みただと思っただが、今度は柔らかい空気が受け止めてくれる感じだった。

「いいなー、長さま、今度ファーにもやっつてね！」

「ああ、今度な…」

「オササマ？」

タウトが手を繋いだまま、相手を凝視した。

「あの…あなたが、ニシカゼの、オサ？」

「ああ、私は西風の長、ルウシエル」

捜し求めていたニシカゼのオサは、月と夜から生まれたみたいに、目の前に立っていた。

「何よります診察よ」

二人の間に、前掛けの女性が割って入った。

「さあ、家に入りなさい」

「僕、診察なんかいい」

「あなたが口も聞けなくなったら、何も出来ないでしょう」

「今は元気だし」

「一人でどうなれたのかしら？ 医者言う事を聞かないと、いつても口も聞けなくしてあげるわよ」

「……」

蒼の里でも西風でも、エノシラに口で勝てる子供なんて昔っからいない。泣きそうな顔で口をパクパクさせるタウトの側に姉妹が来て、姉の方が神妙にささやいた。

「ホントにシンジャウかと思つたのよ。手も足も紫になって」

「ええっ」

「ファー、病人に怖がらせる事を言っちゃ駄目って……」

「はいはい、いつも言われてマスー。行こう、タウト」

姉娘はさっさとタウトの手を引いて、建物に入った。

明るく暖かな居間で、エノシラに触診され薬を飲まされる間、タウトはそわそわと落ち着かなかつた。

少し置いて、長と呼ばれた女性が入って来た。

先程着ていた分厚いマントを脱いで、薄手の部屋着に着替えている。肩の柔らかな曲線が、母様みたい……と思つた。

「あの……」

タウトは、何か言おうとしたが、言葉が煮詰まって鍋底に貼り付いたみたいに、喋れなかつた。

だってその女性は、タウトの前の椅子にゆつたり腰掛け、オレンジの瞳を瞬まはたきませずに、じつとこちらを見つめているのだ。

かしまつたファーがお茶を運んで来て、長はスッと視線をそらせた。そして、お茶を静かにすすって、少し間を置いてから、口を開いた。

「さっき、屋根から共に見ただろう？」

「え？ な、何を？」

「風だ。お前の村には、悪い風など吹いてはいない」

「……！」

タウトは真っ赤な顔をして下を向いたが、長は意に介さぬように、淡々と続けた。

「本当に私の力が必要な時は、お前の父が私を呼ぶ。しかしそうじゃない時は……」

長は、半分残ったカップを静かに置いて、立ち上がった。

「呼はない……」

「アデル」

長が窓に向かって呼ぶと、夜闇に二つの光が滑り、漆黒の少年が屋根から現れ、半回転して窓枠に腰掛けた。

「お帰り、」苦勞だったな」

「なに、飛んで行けば大した事はない。手紙だ、姉者(あねじゃ)」

「あっ、姉者?！」

思わず叫ぶタウトに一警くれただけで、アデルと呼ばれた少年は、懐から封書を取り出した。青っぽい漉き紙は海霧の村で使われている物で、蟬印は海霧の長…タウトの父の物だった。

口をパクつかせるタウトの前を通り過ぎ、長は窓辺でそれを受け取って広げ、静かに目を落とした。

「エノシラ」

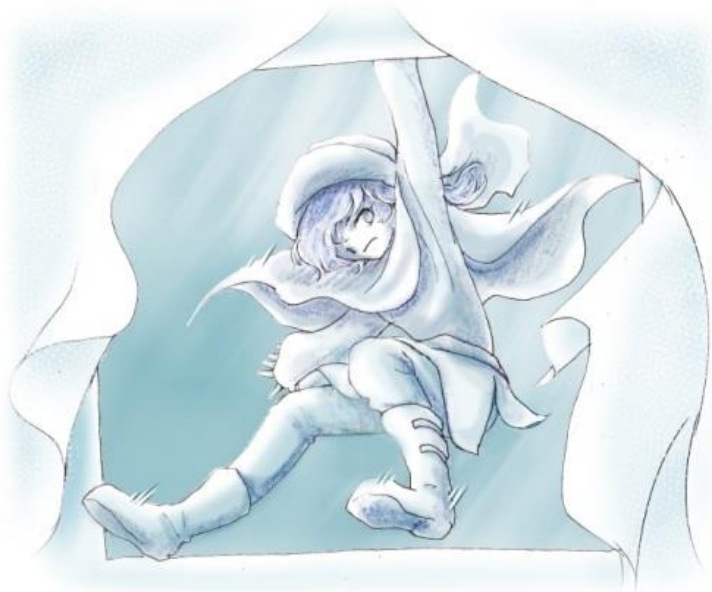
しばらくして目を上げた長は、タウトの方を見ずに、三つ編みの女性に話し掛けた。女性は先程から、眉を八の字にして、黙っている。

「おは」

「タウトはどうだ?」

「一晩様子を見た方がいいわ。でも、もう『命の力の流れる場所』でなくとも大丈夫だと思う。うちで預かります」

「ああ、頼んだ。アデル、済まないが、明日、この子を海霧まで送ってくれ。二人乗りだけれど、行けるか?」



「俺を誰だと思ってる？」

「うん、じゃあ任せた」

「僕、帰らない…」

小さな声で呟くタウトを素通りして、長は、幼い姉妹の前に屈んだ。

「お前達もご苦労だったな」

「うん、あ、はいっ」

ファアは、ちょっとタウトを気にしながら、返事をした。

「この子はまだ身体が治っていないから、看病を頼むな」

「はいいつ。あっねえ、長さま、タウト…」

「ん？」

「ちょっとカノンに似てマスよね」

周囲の空気が凍りついたのを敏感に感じて、ファアはしゃっくりにしたみたいに黙った。

「そっだな…」

長が静かに立ち上がり、姉妹の頭を撫でた。

「エノシラ、後を頼んでよいか？」

「ええ、おやすみなさい」

自身も凍りついていたエノシラは急いで腰を上げ、長に敬意

の礼をした。姉妹も慌てて真似をした。

タウトがドギマギしている間に、長はすっと奥へ姿を消してしまった。

姉妹はちゃっちゃと茶器を片付け出し、エノシラは持って来たストールを、うなだれている子供の肩に掛けた。

タウトは、情けなくて恥ずかしくて、泣きそだった。お目当てのヒトに逢えたのに、相手にもして貰えなかった。っていうか、自分が何を言いたかったのかも、分からないままだった。

「エノシラ、俺も一回帰る」

漆黒の少年が、窓から屋根に手を掛けた。

「ええ、気を付けてね」

「それと」

うなだれた少年をギロリと睨んだ。

「太陽が止まって見えるのは、一つの場所からしか見ていなかったからだ。もっと周りを見ろ、ガキ」

タウトが目を上げると、もう少年はいなくて、窓木戸が揺れているだけだった。

外に出ると、エノシラはタウトの腰に手を回し、支えようとしてくれた。

「僕、独りで歩けるよ」

「今はね。ここから離れたら、そんなに元気ではいられなくなるわ〜」

「〜」

何を言っているのか？　と思ったが、本当に長の家から遠ざかると、サソリに刺された足が、ズクンズクンして来た。

さつき羽根みたいに屋根の上を歩いたのが、ウソみたいだ。

「大丈夫？　ほら、やっぱり掴まりなさい」

エノシラはタウトの腕を取って、自分の腕と絡めた。

「じゅんなぞ〜」

「いいのよ。長様の家はね、西風の部落の中で、命の力が交差する場所に建っているの。色んな力が働くのよ。貴方の症状が重かったから、長様に、一番良い場所をお借りしたので」

タウトは、あの書棚の部屋の爽やかな感じや、水が不思議に美味しかった事を思い出した。

「だったら、長さま、明日までタウトを寝かしといてあげればよかったのに」

半歩後ろを歩くファーが、ふてくされた声で言った。ミィがもう半寝で、抱えて歩く形になっている。

「そっね〜」

いつもはブウたれたら叱ってくる母がぼおっと同意し、タウ

トが暗い顔になったので、ファーは焦った。

「フ、ファーは、タウトといたかったから、タウトがうちに来る事になって、嬉しいよっ〜」

エノシラ宅に着き、暖かいベッドに寝かされたが、タウトは目が覚えていた。

小綺麗な一間を与えられ、親子三人は（お父さんは仕事であり家にいないって、ファーが言っていた）、狭い隣でギユムツと寝ている。大事にして賣っているのに、切ない気持ちで一杯だった。

いきなり、ベッドの下から何か、ヒョイツと出て来た。

「わっ〜」

「しい〜」

口をすぼめたファーが、被って来た毛布をタウトの頭に伸ばした。

「起きてるかなって思って」

「うん〜」

「足、痛い？」

「だいぶん楽になった」

「母さま、名医だもん」

「ああ、うん、そうだね」



「身体ってね、ちょっと痛い思いをしないと、自分で治そうとしないんだって」

「へえ?」

「あんまり『命の力の場所』だけに頼っていたら、ダメなんだって」

「……」

「だから、長さまは、タウトが嫌いなのと違うと思うよ」
「……」

タウトは毛布ごしの薄明かりの中の、そばかす鼻を見つめた。それを気にして、わざわざ言いに来てくれたのか。

「さっきも言ったけれど、タウトはカノンに似ているの。あっカノンって、長さまのゴトモね。額なんか、ホントにそっくり。だから、長さま、ときどきしたんじゃないのかなあ」

「どきどきして、何で?」

「うん、カノンね、行方不明なの」

「行方…不明?」

「そう、三年前から…うちのお兄ちゃんと一緒に」

三年前…まだミィが、ハイハイしか出来なかった頃…。最初に不安を抱いたのはエノシラだった。

「レンからの手紙が来ないのよ」

長男のレンは、同じ年の長息子のカノンと一緒に、遠く離れた蒼の里に、留学に出ていた。

「色々忙しいんだろ？ 男の子ってそんなにマメじゃないって」

夫のシドは、あまり気に止めていなかった。

「レン一人ならね。あのキチンとしたカノンからの手紙もないのよ。最後の鷹が来てから、大分経つわ」

「じゃあ、そのカノンが忙しくなったんじゃないのか？ この間の手紙には、ナーガ長に付いて勉強する事になったって書いてあったんだろ？」

「…でも…」

「心配要らないよ。過保護が過ぎると息子に笑われるぞ」

そう言っていたシドだが、あちらの草原で雪がちらつく季節になると、さすがにソワソワしていた。

「寒くなる前に帰らないと、旅の途中で遭難するぞ」

砂漠の西風の妖精は、極端に寒さに弱い。あちらでの冬越しは無理なのだ。自分も子供時代に留学したから、身に染みて分かっている。

空飛ぶ馬でも数日かかる蒼の里に、こちらから連絡を取る手段は一つ。

エノシラは、戸棚の奥から、大切に包んだ「フシ大の翡翠を取り出して来た。この石をキンキンと叩けば、遠く離れた蒼の里の執務室にある兄弟石が共鳴する。そうすると、向こうから通信用の鷹を飛ばしてくれるのだ。

蒼の一族は、北の草原の頂点に立つ知識の高い栄えた部族で、蒼族の西風の部族に何かあったら、すぐに援助を寄越してくれる。

エノシラも、難しい病気の治療法を、何度も教わった。そもそもエノシラは、蒼の里の出身で、あちらで医学を学んだのだ。

しかし、いつもは石を叩いて半日もせぬ内に来る鷹が、待てど暮らせど来なかった。何日か業を煮やした後、シドが、馬を飛ばして草原に向かった。

そうして数日後、戻って来た顔は、蒼白だった。

「無いんだ、蒼の里が……」

「無いって？ ええっ?! 無いって、どついう事?」

果然と口を開けるエノシラの前で、シドは疲れきって椅子に座り込んだ。

「無いんだ…。元々結界に護られた部落だから、たまに見付けにくい事はあったけれど。僕達には分かるように細工されている筈なんだ。それが、どうやっても見付からない。心配もない。

何日も探したけれど、草の馬が飛んでいるのすら、見られないんだ」

「……………」

あちらに精通したシドが言っただから、そうなのだろう。

蒼の里と交流のあった近隣の部族も、困惑していた。何の前触れもなく、気が付いたら、無くなっていたというのだ。

ナーガ長の奥方の住む風露部落でも、何も分からないとの返事だった。もっともあの部落は、外界とあまり関わらない。

事実を聞いて、西風の老人達は、大パニックを起こした。

彼等は、蒼の里を何より頼りに、心の拠り所にしてきたのだ。

弱小な西風の部族が、他所からの侵略を受けないのは、蒼の里の後ろ楯があるからだと思っている。それがなくなったと知れ渡ると、明日にでも、他部族に襲われるかも知れない。

その時、形だけの西風の長だったルウシエルが、初めて声を上げた。

「我らは古来より砂漠の風を統へて来た西風の一族。誇りを思いついでそう。蒼の里に頼って寄り掛かっていた時代は、終わっただのだ。これからは、自らの足でしっかりと立つ」

この春まで病気で、弱い小娘と思われていた長は、元老院の知らない間に回復し、立派に成長していた。

長の一人息子が蒼の里に留学したきりだと言う事は、皆、知っていた。それだけに、里の皆は、それ以上不満を言うのをやめた。不仲だった元老院すら、取り敢えず、口を塞いだ。

「ナーガの事だ、何か事情があるのだろう。我々がオタオタしたって始まらない」

ルウシエルは、近しい者だけに、そっと言った。彼女の、蒼の長への長年培った信頼は、このぐらいでは揺るがない。シドやエノシラも、それを理解した。

長は、口先だけではなかった。

元々風を流す才能には長けていたのだが、この頃から、先読みの力も発揮し出した。災厄の風を読んで、皆に知らせ、時には清浄な風を操って、砂漠の幾つもの部族を助けた。

特に、鯨岩の街にいきなりの高波が来るのを予知した時は、多くの者が命拾いし、今や砂漠に、西風の部落をどうこうしようなんて者は、いなくなつた。

大昔、浅葱あさぎの君がいた頃のように、皆に敬われ慕われる部族に、なりつつあった。

しかし…、外部の評判と裏腹に、西風の内部は暗かった。蒼の里が消えてしまったという事実は、拭えない。その正体

が分からないと、同じ風の眷族である西風の里だって、油断出来ない。

ルウシエルは境界を強化したが、閉じられた部落の中で、緊張感が不安となって、澁(しぶ)おりのように沈殿した。それはどうしようもない事だった。

そして・・・長に近しい者の、何人かは知っていた。

長が、誰も見ていない所で、…例えば、皆が寝静まった部落の屋根の上で、独り、北の空を眺めてしゃがみ込んでいるのを、そういう弱い部分をけして外に見せぬ為にも、慧砂の境界は、やはり必要だったのだ。

「……だから、ニシカゼのオササマは、僕の顔をまじまじ見たり、見ないようにしたりしていたの?」

「うん、カノンの事思い出したり、思い出さないようにしなくちゃって思ったりで、ときどきしていたんだと思うよ」

「そうなのか…」

「ファアの母さまもそうだよ。眉毛が下がって、ぼーっとしている時は、だいたいお兄ちゃんの事、考えてる」

「へえ…」

気が付くと、ファアの様子や喋り方が、風間とかなり違う。

語尾も上がらないし、しっかりした文章を話している。

「だから、ファアとミィの役割は、母さまがぼーっとしている暇がないくらい、大騒ぎしている事なの」

「大騒ぎが役割なの?」

「こそ、子供がコドモらしくしていた方が、大人はホッとするんだよ」

タウトは、薄暗い毛布の下で、ファアの体温を感じていた。この子は何て温かいんだろう。

「ねえ…じゃあ、僕は、どうしたらいいんだろう?」

「んん? タウトは何をしたかったんだっけ?」

「僕…えーと、オササマに会いたかったの」

「もう、会えたじゃん」

「……」

「会って、何かお話ししたかったの?」

「違う、そんなんじゃない?」

「ん? ん?」

「会って・・・」

タウトは、言葉に詰まった。

本当は、海霧の村を出た時は、そんな目的なかった。倒れて一回生き返って、そしたら急に、生きている間にニシカゼの才

サに会ってみたいくなっただけだ。会ってどうするとか、何も考えていなかった。だから、あのヒトを…、ただ無表情にただだった…。

「僕…、あのヒトに、笑って欲しい」

「へえ、とおして？」

「多分、僕がああヒトの笑い顔、一杯盗っちゃったから」

「え？ 何、それ?!」

「聞いちゃったんだ、父様がお姉ちゃんに話しているの。僕が生まれて来たせいで、ああヒトが不幸になっただけ」

一体、何でこんな事になったのか、エノシラにも分からない。

朝起きたら、タウトのベッドは空だった。ファアの姿もない。

毛布と食料が一揃い消え、既から、ファアの青毛がいなくなっただけの報せが入った。

窓辺にデシヤブな置き手紙。

《ファアは、タウトと一緒に、ちょっと捜し物をしに行きます。

少しの間帰らないけれど、ミィをお願いシマス。タウトのお父さんに、ヨロシクオツタエクサイ》

何て子…! !

エノシラは、手紙を握りしめて、灰色の空を見上げた。

あの子が、いなくなった兄の穴を埋めようと、不自然に気張

っていたのは、分かっていた。でも本当は、自分が思うより、もっと先へ行っていたのだ。

子供の成長の早さにおののくって、いつもいつも急で、ちっとも慣れない…。

* * *

海霧に覆われた谷あいの村に、黒衣の少年の馬が降り立った。すくさま、建物から、二人の人影が出て来る。一人は灰色の長い髪が腰まで波打つ少女で、後から杖を付いて歩いて来るのは、青銀の髪の男性だった。

「タウト! タウトは?!」

「すまない、一緒じゃないんだ」

「ええっ! サソリの傷、そんなに悪いの?」

「いや、それはきつと大丈夫だ」

「??」

「帰るのを嫌がったのか?」

男性が、傾きながら、ゆっくりと歩いて来た。

「うん、まあ、そつだな…」

アテルはぶつきらぼつに、鼻の下をこすつた。

「じゃあ、まだ西風の部落に? ああ、長様がたに、どんなにか、ご迷惑を…」

「いや、あいつを迷惑に思う者など、西風にはいない」

「でも…、ねえ父様、あの子、やっぱり誤解したままなんだわ。

どうしよう…」

「ロカイもロッカイもないだろうっ！」

思わず大声を上げたアデルだが、ビックリ顔の少女に慌てて首を降って、男性の方を睨んだ。

「そもそも、大昔、あんた達大人の間でいろいろあったのは、

誰のせいでもないんだろ？ その後に生まれた子供にだって、勿論、何の罪もない。なのに、たとえ、陰でも、その子供が傷付くような言い方するんじゃないよ！ 聞かれてるとか考えないのか。まったくもおー！」

「……」

「タウトは寝ていると思ってたし、言い方だって、そんなじゃなかったわ。父様は、私が巫女を継ぐ機会に、私達の生まれを教えてくれただけだもの」

口答えしたのは少女だが、アデルは尚も男性にだけ向いて、文句を吐き出した。

「どんな言い方だろうが、当人してみたら、そう受け取っちゃうんだ。自分が生まれて来たせいでどうこうって。大人の癖に、そんなのも分かんないのか」

男性は、黙って、漆黒の少年に言われ放題でいた。

「だいたい、あんたも姉者も、素直じゃないんだ。憎しみあっている訳じゃないんだから、直接会って話せよ。元婚約者だろうが。いつもいつも、ヒトを伝書鳩扱いしやがって」

「ああ、それは、アデル、…すまない」

「謝って欲しいんじゃないよっ。まどうっこしいってんだ」

「父様は、昔、カノンって子を助けた時に、大きな怪我を負ってしまったから…。その姿を、西風の長様に見せたくないのよ」

「そんなの、あんたらが黙ってたら分からんだろが」

「いや、分かるよ」

青銀の男性は、目の下のシワを深くして、その奥でちよっと微笑んだ。

「あの方には何もごまかせない。いつもいつも真っ直ぐに、ヒトの心を見透かすんだから」

「……」

「アデル、きみもそうだねえ」

「な・なんだよ！ なにが?!」

「君に叱られていると、モエギ様に叱られているみたいだ」

「…！ やってられっか！」

ルウシエルの手紙を渡して、男性からの手紙を託され、いつもいつもこんな風に素直にパシッてやっている自分に、自分で呆れる。昨日なんて、いなくなつた子供を砂漠で捜せて、無茶ぶりもいい所だ。どんだけお人好しなんだよ、俺は。

海霧を後にしながら、アアルは空の上で、何度も舌打ちした。

十何年か前…西風の長ルウシエルの婚約者は、出先で馬だけ残して行方不明になつた。亡くなつたと思われていたのが、記憶をなくしてこの村で生きてると分かつたのが、三年前。

ただ、ややこしい事に、彼はその村で、妻子を持ってしまつていたので。姉のシアは妻の連れ子だが、弟のタウトは実子だ。

それで、ルウシエルは、黙って身を引いた。…のに、その婚約者の子供に、昨日、いきなり、会ってしまったのだ。

姉者…、あの子供の前で平静を保つとして、めっちゃテンパっていたな。あんなんじゃ、彼に直接会う勇氣なんか、とても湧かないんだろつ。

「砂の魔なんかは、一撃で沈める癖に…」

〜ファー〜

「怖くないったら、田を開けなよ」

女の子に何度目かに言われて、タウトは細く目を開けた。

黒い毛並みが股の下で躍動し、足の下を白い霧もやが流れて行く。凄く早さだけれど、水の上を滑るみたいに滑らかだ。

「怖くないでしょ」

「うん、多分…」

「多分なの？」

「一回経験したら、怖くなくなるって聞いた。だから、怖くなくなっているんだと思う…多分」

タウトは、自分に言いかせるように言った。

「ふうん?...あ、ほら、前見て、前！」

目を上げると、何だか分からなかつた白い霧は、海みたいな雲の原だと分かつた。その前方が、白紫からばあっとピンクになつた。

「うわあつ」

「いいでしょ、雲の上の夜明け。ファーのお気に入りなの」

女の子は更に青毛を駆って、もう一つ上の早い気流に乗せた。

「す、凄いな、風の民って。君みたいな子供でも、こんなに馬を飛ばせられるんだ」

後ろに乗っているタウトは、齒がカチカチ言つのを悟られないように、頑張つて喋つた。

「ふふ、それ程でもー。でも、ファーだけだよ。部落の中で、

ここまで飛べる子は他にいないよ」

「風の精でもヒトによって違うの?」

「うーん、練習しだいじゃないかな? 誰にでも出来るってア

ディは言っていたよ」

「アディ? アデル? あの黒い子?」

「うん、アデルなんて、砂の民なのに、ファーよりずっと早く飛べるんだよ」

ファーは更に気流を見付けて、空中で馬をジャンプさせて乗り換えた。

「あの子、風の精じゃないの? 西風の長サマの弟だよね?」

「うん、お母さんは風の精でお父さんが砂の民で、長さまは風の精に生まれて、アデルは砂の民に生まれたんだって」

「ふうん…、ねえ、あの子、アデルって…」

「あっ、そうだ、このあたりだ!」

タウトの言葉は中途に、ファーが叫んだ。

目の前のピンクがオレンジに変わり、馬は朝陽に染まる雲の原に突っ込んだ。

「鼻摘まんで、睡飲んでー」

ひゅーっと風が変わり、周囲が暖かくなった。馬は雲の下にズボリと出て、青空の中、降下を続ける。

「お、落ちるー!」

「大丈夫だって。ここいらに湖があるから、ちょっと休もうと思ってる」

今まで見えなかった地面が見えた途端、身体中が縮み上がった。

「ファー、早いよ、早いって!」

「これくらい普通だよ」

「だ、頼むから、ゆっくり降りてくださいー!」

急降下した馬は、地面近くで急ブレーキをかけ、砂塵が上がった。

三日月湖の畔で、ファーは馬に水と麦を与え、火を焚いて湯を沸かしていた。

繁みをガサガサさせて、タウトの情けない顔が出て来た。

「洗って来た?」

「うん……」

「その枝あたりに掛けときなよ、すぐ乾くよ」

タウトは無言で、滴の落ちるズボンと下履きを、灌木の枝に引っ掛けた。

「誰にも言わないって。ハカバまで持って行ってあげる」

「出来れば、君の頭からも消し去ってくれたら、嬉しいんだけど

れど……」

「難しいコト言うのね。うん、分かった、努力する」

「ファーは神妙に言っ、毛布と熱いお茶を手渡してくれた。

湖は三日月型をしているので、馬が降りた円形の真ん中は、水に囲まれている形だった。

下半身に毛布を巻き付けたタウトは、やっと周りの景色を見る余裕が出来て、お茶のカップを持ったまま、迎りをキョロキョロした。

「サソリに噛まれた所、大丈夫？」

「うん、今は何ともない。もう、キタソソウゲンなの？」

「違っ違っ、北の草原は、まだまだもっと遠くだよ。父さまだつて何日もかかるんだから」

「な・ん・に・ち・も・…？」

「うん、言わなかったっけ？」

「タウトが口を尖らせて黙ってしまったので、ファーは話題を変えようとした。

「そっそっ、さっきの続き。ファーは、飛ぶの、アディに教わったんだよ」

「……へえ」

「砂の民に生まれたのに、あんなに飛ぶのが上手なんて、きっ

と、いっぱいいっぱい努力をしたんだと思う。だから、ファーも見習って……」

目の前の男の子が、頼杖をついて、あからさまに不機嫌さを表に出したので、ファーは口をつぐんだ。

「あの子、意地悪だよ。ニシカゼのオサの弟なら、勿体ぶらないで、初めから言ってくればよかったのにさ」

口の中で呟いたのだが、ファーにも聞こえる声だった。カッ「悪いとか捨て置いて、とにかくタウトは、この娘(こ)がアデルを褒めるのを、やめさせたかった。

「あっ？」

「ファーがいきなり立ち上がって、タウトの後ろに回った。

「えっ？ 何？」

「じっとしてて」

うなじをいじられたかと思ったら、チクツと痛んだ。

「ほら」

「ひっっ」

女の子の差し出した赤いヒルに、タウトは情けない悲鳴を上げた。

「洗濯してた時、木の上から降って来たのね。タウト、つくづく虫に好かれるのね」

「木の上からって…、ここいらの木の上には、そんなのがうじゃうじゃいるの。」

タウトは、ファアの指先でウネウネ動くそれを見て、全身がこぼれなくなった。

「うん、水辺だしね。木の上だけじゃなくて、シダの中とか、水を飲む時にも、気を付けなきゃダメだよ」

「フ、ファア…、ねえ、ここから移動しない？ 乾いた所に…」

ファアは黙って虫を繁みに投げ棄てた。振り向いた顔は真顔だった。

「ねえタウト…、行くの、やめるの。」

「そ、そんな事、言っていないよ」

「だって、ヒルの一匹でオタオタ騒いでいるようじゃ、野宿の旅をするなんて無理だよ」

「それとこれとは違うよ」

「ね、今決めて。今なら、西風の側まで引き返してあげる。そして北の草原へは、ファア一人で行く」

「え？」

「ホントは、母さまも、父さまも、いつもずっとお兄ちゃんを捜しに行きたいんだよ。でも、西風の部落にナクテハナラナイヒト達だから、行けないの。だから、ファアが行こうと思って

いたの。タウトに会わなくても、あちらの雪が融けたら、行くつもりだったのよ」

「……」

「父さまは、お兄ちゃんがいなくなってから、飛ぶのを教えてくれなくなった。だから内緒でアディに教わったの。最初からこんなに飛べた訳じゃない。さんざん落っこちて、あちこち怪我したわ。母さまには見せられないから一人で治した。ファアはね、早く皆に普通に笑って欲しいの。だから行くの」

「……」

「タウトは長さまの為にカノンを見つけに行きたいって言ったけれど、本当に、心から、そう思っているの？ ただ行く素振りを見せただけで、好いて貰えると思ったんじゃないの？」

「ち、違うー！」

「だってタウト、自分の事ばかりじゃない。アディにお礼言った？ あんなに一生懸命助けようとしてくれたのに」

「……」

「ファアは、馬に草をあげて来る。帰って来るまでに、どうするか決めて置いてね」

三つ編みの女の子は青毛を引いて、湖の切れ目を渡って森の方に行ってしまった。

残されたタウトは、下を向いて唇を噛むばかりだった。

あんなにズケズケ物を言われたのは、生まれて初めてだ。ちよつとヒルを嫌がっただけで、あそこまで言わなくてもいいじゃないか。こっちは虫で死にかけたんだぞ。

こんなのじゃ、本当に一人で旅をするのは無理かもしれない。でも、だったらどうしよう。馬に乗れない自分は、何も出来ない。急に、それまで気に止めなかった無力感が、ひしひしと迫って来た。

がささ、と音がして、慌ててペソかきを拭って顔を上げた。灌木の間から現れたのは、馬だけだった。

「っ?」

馬は目をむいて、鼻を鳴らして前かきをしている。タウトはソクッと胸騒ぎがした。

「どうしたの? ファーは?!」

毛布を巻き付けたまま灌木の林を歩くと、程なく、ぬかるみに座り込んだファーの後ろ姿が見えた。

「ファー…?」

「動かないで!」

小声で制す彼女の視線の先を見て、心臓が止まりそうになった。さっきのヒルの何万倍もの大きさの奴が、十歩先の沼地に

プカプカ浮かんでいるのだ。

赤黒く光る背中だけでも、馬の胴体程もある。尖端から針みtainな白い触手が無数に伸びて、ファーに届くか届かないか位の空間を、ワジャワジャ動いている。

「…タウトは、まだ見つかっていないから、そのまま後ずさり
で逃げて」

「ファーは…」

「何とかするから、早く!」

ファーは微動だにせず、空気すら動かさないように、早口で喋った。

その時、赤い虫が、ゆっくりと上体を持ち上げた。水から上がると、最初思ったのより、ずっと大きい。

タウトは震える足で一生涯後ずさりした。

そうするしかないじゃないか。自分は無力で何にも出来ない。ファーは風の民だし、きつと術が何か手段があるんだ。あの子は虫なんかへっちゃらな筈なんだから……。

目の前の赤い虫が鎌首を持ち上げ、ヒヤリとする触手が腕に巻き付いた。

ファーは硬直して動けなかった。

この森のヤチタモの沼地に、大虫の巣があるのは聞いていた。

だから用心して開けた湖の中洲に降りたのに、タウトと喧嘩して、うっかり危険な場所に足を踏み入れてしまったのだ。

自分の汗だ。タウトのせいにしちゃダメ。自分で何とかしなくちゃ。こんな事で挫けていたら、お兄ちゃんを援けに行か旅なんて、出来っこない。

腰にあるのは、申し訳程度の短剣だ。西風の部落では、長剣が許されるのは十二歳からなので、まだ持たされていない。

相手はきつと素早い。こんな小さな剣を、相手より早く急所に突き立てる事が、出来るだろうか。

虫の筋肉が緊張で縮み、飛び掛かるタイミングを計っている。気合いを緩めたらおしまいだ。両手が脂汗で熱くなっている。

「うあああああ——!!」

横の繁みを突き破って、棒を振り上げたタウトが飛び出して来た。

反射に優れた虫でも、ファーに集中が行っていたので、最初の一撃を、もろに食らった。

——ギョウブウ——

鼻先を潰されて、虫は苦しいうめきを上げた。子供は更に棒を打ち降ろしたが、今度は空振った。素早い触手が、棒を持った腕と首に巻き付く。

「あああ」

しかし触手はすぐタランとなり、虫はダブンと音をさせて、沼に引っくり返った。

下敷きになりかけたタウトを、又ル又ルの手が引く張った。
「大丈夫?」

虫の延髄に短剣が根元まで刺さり、髄液を浴びて真っ赤の女の子が、掴んだ手を更に引き寄せた。

「う、うん」

「・・・って、何?! きゃあああ!!!」

「えっ?」

「あっち行って、あっち!」

毛布を脱ぎ捨てて来たタウトは、下半身すっぽんぽんだった。・・・しかし、そこを気にする所か?」

二人で支え合いながら湖畔に戻り、綺麗な水で身体を洗った。

「こっち見ないでよ」

「分かってるよ、そんな平らな身体見たって、楽しくも何ともないし」

「何か言った?」

「ううん」

「...入っばこの癖に、よく引き返して来たわね」

「……」

「まあ、・・・アリガト」

「うん」

服は生乾きだが、陽があるうちに、ここを移動する事にした。

フアーだって本当は、虫を平気なんかじゃない。

さっきの返事をしていないが、二人共、今更それに触れず、

黙々と準備をした。

「北って寒いんだよね。寒いってどのくらいなんだろ」

「さあ…、でも母さまの出身地だから、ヒトが住めないような寒さじゃないと思う」

フアーは鎧皮を伸ばして、タウトを促した。

「あの…あのさ、フアー」

「んん？」

「僕に、馬の乗り方を教えてくれない？」

「……」

「その…飛べるかどうかは分からないけれど、乗り方とか、世話の仕方とか、馬具の付け方とか、一緒に旅をするなら、ひと通り習っておいた方がいいかなって」

「うんー」

女の子は明るい顔になった。

く 石榴 (ざくろ) く

残雪の峰を頭上にたたえる、山麓の街。

昔から、北と南を行き来する商人達の山越え前の宿場として栄え、季節ごとちよっとした市も開かれる。

今は丁度春の市の最中で、大通りは、北の冬仕事の工芸品や南の早なり果実、海の干魚、山の幸、菓子の露天、子供相手の人形芝居等、色とりどりに賑わっていた。

中央広場の大きな石榴の木の下に、ちよっとした人垣が出来ている。

「さあさあ、特にご覧じろ。巧く行ったら拍手ご喝采〜」

判で押した口上をのべるのは、しめ縄みたいな三つ編みの、風の妖精の女の子。掌の中で小さな風を起こして、木の葉をクルクル回してする。

十歩離れた石榴ざくろの木の下には、幹にピッタリ背中を付けた、灰色の巻き髪の子。頭に大きな石榴の実を乗せて、緊張して立っている

「フ、フアー…本当に大丈夫なんだろうね」

「うん、多分大丈夫だよ、見てて」

女の子は右手に持った小さめの石榴を高く放り上げ、左の掌

をヒュッと返して、木の葉を飛ばした。

木の葉は風に乗って矢のように飛んだ…が、まったくアサツテの方向だった。観客の後ろの方で、木の枝がパシッと弾けた。木の葉の癖に、そこそこの破壊力がある。

「ま、まあ、だいたい、大丈夫ね」

「ファー・・・」

「大丈夫だったら！ ファーは本番に強いのに」

「いや、ちょっと待ってっ」

二人のやり取りに、人垣からクスクス笑いが起る。

「ここだよ言わないの！ タウトが食料袋を落っこしちゃうから悪いんですよ。ほら、動いたら危ないわよ！」

「だ、だって、そもそもファーがちゃんと縛っておかなかったからで…、わああっ、待って待って待って！」

「じっとしていなさいったらー！」

ギャラリィに丸聞こえの口喧嘩の挙げ句、女の子の放った木の葉は、明らかに頭の石榴より低かった。

「ひいひい……！」

慌てて臥せた男の子の頭上をかすめて、木の葉は、木の幹にピシリと刺さった。灰色の切れ毛が散り、ワントンポ遅れて、石榴の実が、彼の頭にゴンと落ちて割れた。

「痛ったあ」

「ま、まあ、結果オーライね。見事、石榴の実はまっぶたつ」

女の子が衣服の裾を掴まんで仰々しくお辞儀をすると、それまで堪えていたギャラリィが大笑いした。

「よしよし、兄ちゃんのガンバリ料だ。これでお菓子でも買って仲良くお食へ」

小さな袋に皆の投げ入れてくれた銅貨が、思った以上の膨らみになった。

「ありがとうございますっ」

二人は揃ってお辞儀をし、そそくさと人混みに消えた。

「何だか夢中だったけれど、あんなのでよかったのかしら」

路地裏の石段に、並んでしゃがみ込む二人。

「この街の人達は、大道芸なんか見馴れていて目が肥えているから、かえって失敗芸の方がウケるんだよ。僕ら、子供だし」

「へえ、そういうモンなの？ タウト、村から出た事ないって言っていたのに、『シッパイ芸』とか、よく知っているわね」

「父様が話してくれる物語に、そういうくだりがあったから」

「父さま……長さまの……」

「うん……」

ファーは口をつぐんで、手元の小銭を選び分ける作業に集中した。

長さまの婚約者…カノンのお父さんがずっと行方不明なのは知っていた。行方不明の原因が、事故で記憶をなくしたからで、流れ着いた海霧の村で別の女性と結婚して子供までいる…ってのは、つい数日前、その子供本人から初めて聞いた。

長さまはもっと早くに彼を見つけていたが、子供がいたので、黙って身を引いたという。

自分に見てみたら、大好きなカノンと長さまに寂しい思いをさせているその男性は、嫌いだ。タウトの父さまだから黙っているけれど、そのヒトの話をするのは、嫌だった。

二人は小銭を数え終わった。

「これだけあれば、自分の食料と燕麦が買えるわ」

ファアの言葉が終わらない内に、背後から大きな手が伸びて、袋を取り上げられた。

「あっ…」

後ろには、大柄な男が数人、厳しい顔で立っていた。

大人がイタズラした子供を叱るのは、雲囲気が違う。

「ガキども！ 市場は子供の遊び場じゃねえ。二度とやるな！ 今度やったら、ただじゃおかねえからな！」

二人の子供は、息が止まって硬直した。何だかんだ言って、

二人とも、子供を大切に作る小さな部族で育ったので、大人に

本気で罵倒された事なんて、なかったのだ。

「そ、その銅貨、僕達の…」

何とか声を出したタウトに、正面の男が、分厚い掌を振り上げた。

——！！——

思わず抱き合った二人だが、ぶたれる素振りがないので目を開けると、男達との間に、一人の女性が割り込んでいた。

「およしなさい、大人気ないったら」

タウトとファアの前に立った女性は、男達よりずっと小柄で細いのに、背筋をシャンと伸ばして負けていなかった。黒髪をキラリと結び上げ、キラキラした黒い瞳も紅い唇も、状況を忘れて見惚れる程に、美しい。

「もういいでしょう。この子供達、二度とあんな事しないわよ」

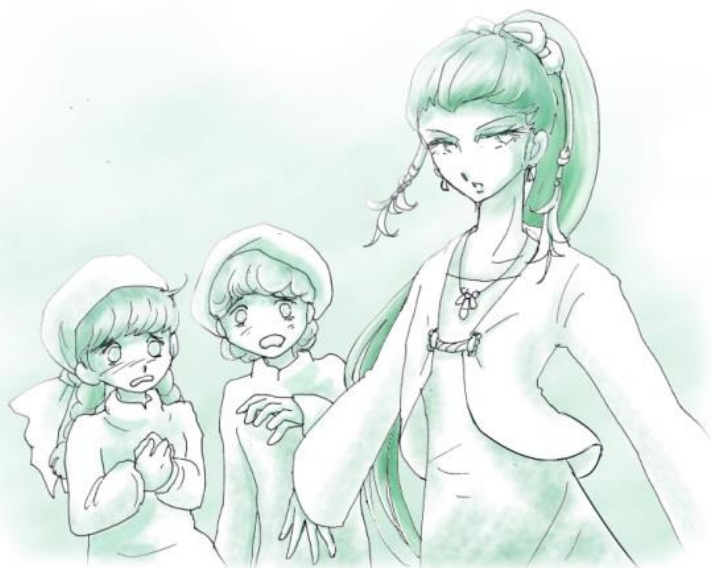
「あんたがこいつらの親か？」

「赤の他人だけれど、通るすがりにこんな場面に出くわしたら、止めざるを得ないでしょう」

「ふ、ふん…、まあ、しょうがない」

男達も、この女性の威圧感に、ちよっと飲まれたみたいだ。

ドタドタと乱暴な足音をさせて男達が立ち去った後、女性は



肩を竦めて、しょぼくれている子供を見下ろした。

「僕達の銅貨ア……」

「ええ、でも、あなた方の物ではなかったのよ」

「だって、ファー達が芸をして、集まったお客さんがそれに払ってくれたのよ。それがどうしてファー達のものじゃないの?」

女性はもう一度肩を竦めて、努めてゆっくりと話し出した。

「うーんと……じゃあね、市場をやっていないくて、日常生活をしているただの街だったら、貴方達の袋にあんなに銅貨が入ったかしら?」

「……んっと……」

「石櫓の木の下でどんなに叫んでも、皆は子供がふざけているとしか思わない。勿論、誰も足を止めたりしないわ」

「……」

「今が市場で、街中がその雰囲気になっているから、皆も大道芸に銅貨を払う気持ちになっている。言わば市場全体で、皆の財布を緩める空気を作っているのよね」

「……」

「市場は、一つ一つのお店が勝手に集まってやっているのではないわ。あの男のヒト達が、ちゃんと話し合って運営しているの。そうして苦労して作った場に、子供だからって甘えて入り込んで勝手な事やったら、そりゃ怒られるわよ。いい? お客

さん全体が、大道芸に払う金額は、変わらない。あなた達は、正規の芸人さんの取り分を盗んだのと同じなの。だから、銅貨も返さなきゃならなかったのよ。・・・あら」

気付くと、女の子の方が鼻を赤くして、目に一杯涙を溜めて
いる。

「ま、まあ、怖かったのよね、分かんないわよね、子供だもの。
これからは気を付けなさいな、じゃあね」

女性は、罰悪い顔をして、二人から離れた。

黒髪の女性は、墨で線を引きいたようなポニーテールをなびかせながら、人混みと反対方向に歩いた。

街入り口の馬繋ぎ場に小さな公園があり、木陰のベンチに座っていた男女二人が、手を振った。

「お帰り、シート。いいビーズはあったか？ どうした？」

鉛色の肌の女性が、表情の冴えない黒髪の女性を覗き込んだ。

「ああ、ちょっと落ち込む事があったの。はい、綺麗な色の陶玉があったわよ、カーリに半分あげる」

「わあい！」

嬉しそうにビーズを選び分ける女性達の横で、赤毛に羽飾りを付けた男性が、広げていた地図から顔を上げた。

「シートが落ち込むコトって、実は端から見たらどうって事な

いコトばっかだからな」

「そんなに複雑じゃないわよ。子供を泣かせちゃったの」

「シートを見ていきなり泣き出したのか？」

「まさか！」

男性は冗談で言っている感じのだが、シートと呼ばれる女性
性は、どうやらムキになる性質(タチ)のようだ。

「子供が広場で大道芸の真似事をやって、裏で叱られていたの。
殴られそうになったから、止めたのよ」

「ええっ！」

赤毛の男性は、真剣な顔になって身を乗り出した。

「何て無鉄砲するんだ、突き飛ばされて転んだらどうするっ」

「ヤンは心配性過ぎるわ」

女性はちょっとむくれて、お腹に手をやった。

「安定期に入っているもの。ちょっとやそっとは大丈夫よ。それよりの…子供って難しいわね。泣くタイミングがちっとも分らなかった。駄目だわね、私。それで落ち込んだの」

「ま、まあ、シートのお説教をマトモに食らったら、子供でなくとも泣くかもね」

デリカシーのない赤毛の男性を横に押しやって、カーリと呼ばれた女性が割って入った。

「心配する事ないよ。シータのお説教は分かりやすいもの。その子供にも、きつとちゃんと伝わっているよ」

「そっかな…」

「うんうん、すぐには開けられない箱でも、渡しておけば、いつかふと開けられる日が来るんだって。これ、エノシラの受け売り」

「だといいただけだね…」

黒髪の女性は、もう一度お腹を撫でて、溜め息した。

「もつ買い残しはないか？ この先当分、遠出は出来ないんだからね」

馬繋ぎ場に向かいながら、赤毛のヤンは、連れの二人の女性に言った。

「うん、わらわは、市場の雰囲気が好きだから、この空気を一杯吸い込んで帰る」

言葉に少し訛りのある銚色の肌のカーリは、二人から数歩離れて、大きく深呼吸した。

「あら、じゃあ、私も」

黒髪のシータも隣に並んで、真面目にスーハーし始めた。

「あんまり吸い込むと、お腹がパンパンになって、赤ちゃんがビックリするぞ」

ヤンは、後ろで苦笑いだ。

仲良く同時期に身籠った妻とその親友が、馬に乗れなくなる前に市場に来たがったので、今回お伴で連れて来たのだ。

もっとも彼には、別件で本来の用事があった。

「あっ！」

シータが叫んだ。

「どうした、買い忘れか？」

「ああ、うん、そうそう。直ぐに戻るから、その辺に座って待っていて」

シータは慌てた感じで、黒髪を翻して駆けて行った。

「転ぶなよ！」

ヤンは大声で言うてから苦笑いした。

「ホントに女性って買い物好きなんだ」

シータは、今しがた遠目に見つけた物に向かって走った。

「ああ、やっぱり！」

案の定、さっきベそをかいていた女の子が石榴の木の下に立つて、周りに人垣が出来ている。

「あんなに言ったのに…！」

人垣を割って入ろうとして、足が止まった。

女の子の前には、さっきの男の子ではなく、大人の男性が立っている。市場では見知った、ナイフ投げの大道芸人だ。

「お、おじちゃん、ホントにダイジョブなの?」

「さてね」

「ええ〜?!」

「失敗はしないさ、タマにしか」

「や、やっぱヤメル!」

「おっと!」

男の投げたロープが生き物のように動いて、逃げようとする女の子を、木の幹に縛り付けた。ギャラリイから、感嘆の声が上がる。

「何すんのよ、キャア!」

続けて投げられるナイフが、女の子をギリギリにかすめて、

両耳の横に刺さる。見物人は大喜びだ。

「さて、次はこうだ」

芸人は、仰々しく取り出したターバンで、自分の目を目隠しした。

「こらー! 何自分で難易度上げてんのよ! やめてっは!」

呆気に取られているシータの袖を、下から引っ張る手があった。

「あ、あなた…」

「大丈夫だよ、あの目隠し、透けて見えるんだ」

さっきの男の子が、大きな箱を抱えて笑っていた。

「あの子、なかなかの演技力でしょ」

「……」

二人は、人垣から少し離れた。

「さっき言い損ねたの。どうもありがとうございます」

男の子は、ちょこんとお辞儀をした。

「あの後ね、僕達話し合って、ウンエイのおじさん達の所に行っただの。特にファーは、知らない間に盗人になっていたのがショックだったんだ。でね、僕達が旅の資金が必要なんだって事情を話したら、仕事をさせて貰える事になったの。ファーは芸人さんのサクラで、僕は荷物運び。一杯あるから、もう行かなきゃ。じゃあね」

何も言えずに黙っているシータに、男の子はちょっと戸惑って、もう一度お辞儀をして去りかけた。

「あっあの…」

「なあに、お姉さん?」

「旅…、頑張りなさいね」

「うん!」

「ありがとう…」

「あは？ お礼をいうのは僕達なのに」

「うん、ありがとう…、本当に、ありがとう…」

シートが馬繫ぎ場に戻ると、カーリー一人しかいなかった。

「ヤンは？」

「うん、いつもの手紙を運んでくれる人が、今着いたらしいの。

あっちに受け取りに行ってる」

「ああ、そうなの」

ほどなく、遠くの人混みからヤンが姿を現して、こちらに駆けて来た。

「じめん、じめん」

彼の手には、何通かの書簡の束がある。

「ほい、カーリー、フウヤから手紙だ」

「ええっ、本当?!」

鉛色の肌の女性は、顔をばあっと輝かせて、輒封された巻き紙を受け取った。

彼女の夫のフウヤは彫刻家で、三峰の狩りのない季節は、注文を受けて各地を飛び回る。春先はだいたい、南の砂漠の鯨岩の街にいる筈だ。

フウヤとヤンの知り合いに、このこと砂漠を頻繁に行き来する

旅商人がいるらしくて、ごうやってちよくちよく手紙を届けてくれるのだ。

「今日もつ受け取れないかと思っていたんだ。行き会えてよかった」

言いながらヤンは、カーリーに渡したのとは別の書簡を開いて読み始めた。

「ヤンにも連絡なの？」

「うん、ちよっとね」

届く手紙は、フウヤからのものだけでなく、シータの知らないヤンの友人からだったり、イフルート族長宛てや、別の者に回す手紙もあった。とにかくヤンは、手紙のやり取りが多いのだ。

シートは深くは聞かなかった。このヒトは昔から、掴み所のない部分がある。特に親友のフウヤとの絆は、自分には入り込めない、特別な物だと思っていた。

「あっ！ ねえねえ、フウヤから君に伝言だって」

「えっ、何て?!」

「シタの娘とソラの息子が、家出してその辺をほっつき歩いてる筈だから、会ったら説教しといてくわって」

「嬢ちゃん達、本当に一緒に来ないかい？」

草が立ち上がったばかりの、ひんやりした草原。今越えて来た山が、後方で春霞に埋もれている。

「はい。ファー達には、やらなければならぬ目的があるの。おじさん達とお別れするのは寂しいけれど」

ファーとタウトは、旅のテキ屋の一回に囲まれていた。

山向こうの街の市場で働かせてもらい、そのまま世話になって、一緒に山越えをして来たのだ。本当は、ファーが馬を飛ばせれば、こんな山、ひとつ飛びだ。でもファーが強く希望して、彼女の馬は、旅の一座のお年寄りと大きな荷物を運ぶ役割を担った。お陰で一座は、いつもの半分の労力で、山を越える事が出来た。

タウトはブーたれるかと思いきや、自ら馬で運ばれるのを断って、荷物を担いで険しい山道を歩いた。何でだかそうしたかったし、山越えを終わると、マメだらけの足の違う自分になった気がして、物凄く嬉しかった。

「これを持って行きなさい」

一座の長の男性が取り出したのは、数日前に二人が取り上げられた銅貨の袋だった。

「貰えないわ。お仕事の報酬だったら、もう食料で買ったもの」

「旅をするなら現金が必要だよ」

「おじさん達だって旅をしているじゃない」

一座の大人達は、苦笑した。この風変わりな娘の妙な理屈の通じ方は、ここ数日でよく分かっている。それにしても、この子供達の世間知らずの度合いは、ちょっと心配なのだ。

「じゃ、坊主にやる。このお嬢ちゃんに、女っ気のある装飾品の一つでも買ってやれ」

タウトは、差し出された袋の前で、眉を八の字にした。

「僕達、本当に要らない。だったら、笛吹きさんが踊り子のお姉さんに買ってあげればいい」

「!!・・・ぽっ・・・!!」

一同、一瞬止まって、堪えきれない含み笑いを頬に溜めた。

笛吹きは一座で一番大人しい若者で、鼻っ柱が強い踊り子を、そっと想っている。周知の事実だが、皆、頑張って触れないようにしていたのに…。座長は観念して、銅貨の袋を引っ込めた。

「じゃあ、これを持って行かないか？」

気の弱そうな笛吹きが、そっと進み出た。手には、赤ん坊の拳位の丸笛。小さいが造りは凝っていて、花や鳥の浮き彫り模様様に美しい彩色が施されている。

「ファーは目を見開いた。実は、笛吹きさんの胸にかけられたそれに、いつも目を奪われていたのだ。」

「でも、笛がなくなったら、笛吹きさんは困るわ」

「いや、この間新しいのを手に入れたので、これはもう使わな
いんだ」

「本当」

「ああ、これなら荷物にならないし、いざという時、売ればち
よっとはお金になる」

「売ったりなんかするんですか!」

「楽士はにっこりして、ファーの首に笛の革紐をかけてくれた。」

馬上で手を振る二人の子供が見えなくなつてから、踊り子が
笛吹きに話し掛けた。

「あんた、よかったの? あんな貴重なプレミア物。売って欲
しいって金持ち、一杯いたでしよう」

「う、うん…:ごめん…:」

「何で謝んのよ、責めてんじゃないわよ」

「座長が割って入った。」

「まあまあ。あの子達の向かっている北の草原は、風の民が姿
を消してから、治安が悪い。野宿などは避けた方がいいしな。」

あれなら、いざという時に売れば、相当な額になる。何せ、マ

ニアの間で垂涎(すいぜん)の、風露(ふうろう)ブランドの印入りだ」

「でも、売らないですよ、あの二人は」

「楽士の声は小さかったが、何故か隅々の者にまで聞こえた。」

それから、いつの間にか隣に来た踊り子と、皆と、もう一度、
子供達の去った薄紫(うすむらさき)の空を眺めた。

「どうした、誰か来るのか?」

まだ冬枯れの残る、湿った草原。カタカゴ咲き誇るハイマツ
の丘に、二人の蒼(あざ)の妖精の姿があった。

地面に耳を付けていた子供が、ゆっくと起き上がる。泥の
付いた頬はエクボを作って、ニコニコしていた。

彼の背中には、斜めに閉じた緋(ひ)い片羽根がある。

「お前が笑っているのなら、来るのは『良きモノ』だな」

そう言つて、もう一人の妖精は、水色の長い髪をなびかせて、
蒼(あざ)の里(さと)があった筈(はず)の、何も無い草原を見やった。

「本当に、きれいさっぱり消えちまって・・・」

く II へ く

